

「当用漢字改訂音訓表」における音訓の追加の研究

高橋雄太（明治大学）

1. はじめに

日本の漢字政策史上ではじめて漢字の音訓に制限をもたらした漢字表である「当用漢字音訓表」（1947年）があり、同表は、現在に至るまでに「当用漢字改訂音訓表」（1972年）、「常用漢字表」（1981年）、「改訂常用漢字表」（2010年）の3段階にわたって改訂されている。一連の改訂は制限を緩める（音訓を追加する）改訂されたが、その初期段階である「当用漢字音訓表」から「当用漢字改訂音訓表」にかけて追加された音訓が、両表の施行前後にどの程度用いられ、どのような語彙的・表記的な特徴を有しているのかについては、個別語の改訂への言及を除いて、研究が十分に及んでいない。

「当用漢字改訂音訓表」における改訂の実態と要因を、近現代の通時コーパス（昭和・平成書き言葉コーパス、SHC）における昭和期の表記の実態と照合しながら検討し、明らかにすることを目的とする

2. 「当用漢字改訂音訓表」における音訓の追加の実態

音訓の追加された字数

「当用漢字表」掲載字1850字のうち、音訓の（異語形や派生形への転用を除く）追加が行われたと認定されたのは、223字（12.1%）であった。そのうち、字音が追加されたのは21字、字訓が追加されたものは207字であり、訓の追加が中心であったとわかる。

漢字に対する訓の追加

訓が追加された207字のうち、「当用漢字音訓表」にて音専用字であった漢字が143字であり、元々対応する訓を持っていた漢字が64字であった。

◆SHCにおける訓の使用頻度の差

- 当用訓>改訂訓 が 64字中56字（頭 等）
- 改訂訓>当用訓 が 64字中8字（魚 等）
- 当用漢字音訓表では「一字一訓」が基本

文字	頭	魚
当用訓	アタマ類 1305件	ウオ類 16件
改訂訓	カシラ類 15件	サカナ類 249件

訓に対する漢字の追加

「当用漢字改訂音訓表」においてはじめて対応する漢字を得た訓は145訓（笑む、戦（いくさ）、難しい、惨め、際（きわ）…）であり、元々対応する漢字を持ち新しく対応する漢字を得た訓は60訓（川+河、長い+永い、戦う+闘う…）であった。

◆SHCにおける漢字の使用頻度の差

- 初期字>追加字 が 60訓中54訓（ナガイ等）
- 追加字>初期字 が 60訓中6字（タズネル等）
- 当用漢字お訓票では「一訓一字」が基本

区分	ナガイ類	タズネル類
初期字	長1124件	尋165件
追加字	永262件	訪295件

- 当用漢字音訓表では「一字一訓」「一訓一字」を基本とし、その漢字にとって、またはその訓にとって使用頻度の高い代表的なものを採用する方針があったと認められる。
- 当用漢字改訂音訓表では、中低頻度の訓や、同訓異字を広く認めて制限を緩和して表記選択の自由を広げる性質を持った改訂であったといえる。

3. 個別語の分析（「難」への訓（ムズカシイ）の追加）

当用漢字改訂音訓表にてはじめて対応する漢字を得た145訓に注目し、「難」を事例として、改訂訓としての「ムズカシイ」の追加の要因を考察する。

- 「難」を取り巻く訓の消長（図1参照、ムズカシイへの「難」の使用頻度の向上）
- ムズカシイの表記の安定（「難」の定着、表記ゆれの安定）
- カタイ・ガタイとムズカシイの位相差（当用漢字改訂音訓表における口語的、平易な訓の採用傾向）
- ムズカシイの意味変化（人物や性格を形容する意味中心から物事の難易度を表わす意味中心に変化、「難-」「-難」の漢語との親和性の向上）

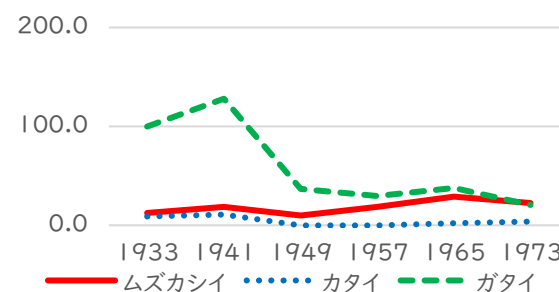


図1 「難」の各訓の使用数

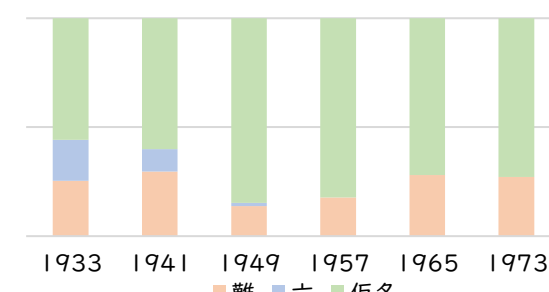


図2 ムズカシイの表記の推移

4. おわりに

- 改訂は中低頻度の訓や漢字表記の制限を廃し、表記選択の自由を広げる性質であった
- 今後は個別語の分析を用例ベースで行い、訓の追加の背景への考察を深めたい

本発表は科研費 基盤研究 (A)「昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究」（代表：小木曾智信）の成果の一部である。